

〔研究ノート〕

**風景と日常を楽しむ文化を通じた持続可能な観光に関する研究
— イギリス・コッツウォルズ地方を題材に — ***海津ゆりえ^{**}・山口一美^{***}

〔Research Note〕

**Study on sustainable tourism based on landscape, culture and lifestyle
— Case study of Cotswolds, England —****Yurie KAIZU Kazumi YAMAGUCHI**

This research note aims to study on National Trust, Footpath and Natural Garden, what are important tourism resource and cultural heritage in England. As already well known about schemes of National Trust, Footpath, Natural Gardens, basic concept of them are to share importance and value of common lifestyle of each region and individuals to all. This kind of scheme would be important to sustainable development of region and tourism under current paradigm of tourism. Through the case study in Cotswolds, some key points were obviously clarified. 1) Recreation culture to enjoy daily life and landscape should be developed more, 2) Walking activity should be more improved, 3) Natural beauty such as garden is basic infrastructure to raise tourist satisfaction, 4) Volunteer culture should be investigated. It is possible to apply these English system to Japanese rural area such as Chigasaki is another conclusion of this study.

1. 本研究の背景

観光立国推進基本法に示されているように、わが国の観光政策は20世紀後半において主流であった団体型・アウトバウンド型から、エコツーリズムやグリーンツーリズム、ヘリテージツーリズム等に代表されるような、地域主導型で個人の体験を重視したスタイルへと移行している。これまで観光地ではなかった一般の地域が集客を通じた交流人口の増加による地域再活性化をめざすようになり、1990年代後半から、過疎化と産業構造の崩壊に直面している農山漁村などにおいて、農林漁業体験や自然体験などのプログラム化が行われるようになってきた。2000年以降はさらに旅行商品へと発展させて旅行者と地域の間にとって旅行商品の流通を行う、いわば仲介組織を設ける地域や、観光協会が旅行業の免許を取得して旅行商品を販売する地域も現れるようになった。このよ

* 本調査は平成21年度共同研究「地域開発における人材育成の研究（研究代表者：林薫）」の一環として実施されたものである

** かいづゆりえ（国際観光学科）

*** やまぐちかずみ（国際観光学科）

うに観光に地域活性化の糸口を見いだそうとしてまちづくりに取り組む自治体の活動をさして「観光まちづくり」と呼ぶようになったのも同時期であった。旅行会社や国土交通省のような行政機関などがこのような商品販売の形態を「着地型観光」というキーワードで総称し、普及するようになったのは、2004年頃以降のことである（尾家・金井，2008）。

このような現象の一つの側面は、国民にとっての観光のありようの変化であり、もう一つの側面はコミュニティにとっての新しいビジネスの開拓であるが、いずれにおいても現在は過渡的な段階にあるといえ、今後いかようにも変わりうるといえる。とくに、コミュニティ・ビジネスとして観光をとらえている地域では、短期的視野で集客を図ろうとしてイベント型企画を連発して住民の疲弊を招いたりする例が出ている。コミュニティで進める観光の望ましいあり方とは、もともと地域がもっている潜在力を磨くことによって、地域の環境や風景や地場産業などの総体が商品となり、人々が訪れることが常態化することと考えられる。地域全体が観光対象となるのでなければ、観光ビジネスの現場は相変わらず地域から遊離したままであると言えよう。そのためには、風景や、潜在する資源を引き出し、持続的に人が訪れたいくなるような「光」として提示し、利用されるしくみが必要である。同時に、それらの資源を保全・管理するしくみも構築されることが望ましい。

観光と地域づくりを一体化させようとするとき、参考となる事例地域のひとつは英国である。英国は、ナショナル・トラストなどの仕組みを有し、特筆すべき資源ではなくとも、地域に根ざした資源を多数保有し、守りながら観光に結びつけている。そこで本研究は、英国コッツウォルズ地方に焦点を当て、観光対象資源の保全と活用の実態を把握し、地域の観光資源の維持管理および活用と観光者満足の上の仕組みを明らかにすることを目的とした。研究1として、ナショナル・トラスト、フットパスなど英国発祥の地域を楽しむ観光のしくみとその維持管理の実態について把握を行った。最後にコッツウォルズと類似した日本の里山における展開の可能性について考察を行った。研究2として庭園に焦点を当て、その実態の把握を行った。その上で観光者が満足し、再度の来訪をうながす要因を明らかにした。なお研究1は海津、研究2は山口が行った。

研究1

1. はじめに—研究の背景と目的

美しい田園風景と、ナショナル・トラストによって守られた風格ある歴史的建造物群は英国の魅力の一つであると言ってよい。例えばピーター・ラビットの作者ビアトリクス・ポターが寄贈した家や農園や、ワーズワースの住居（いずれもナショナル・トラスト）がある湖水地方は、英国を訪れた日本人の多くが訪れる観光地となっている。林望（1993）は、イギリスの風景について「まったく無名の普通の土地、そこにこそイギリスの風景の魂は宿っている。（中略）何でもない風景を見る目が、またその風景を美しく作ってきた」と述べている。

本研究は、その風景を楽しむ装置の典型であり、イギリスを発祥地とする①ナショナル・トラストと、移動手段としての②フットパスについて、その指定や維持管理の背景および実態について明らかにし、無名の風景を観光資源として持続的に維持管理してきた理由について考察することを目的とした。

2. 研究手法

本研究は、文献調査および現地調査により行うこととした。現地調査の対象地は、コッツウォルズ（Cotswolds）とした（図1-1）。コッツウォルズはイングランド中西部にあり、「イングランドの

心」と呼ばれ、イギリス人が愛する原風景を最も有すると言われる地方である（前掲書）。なだらかな丘陵地に、この地方固有の「はちみつ色のレンガ」を積んだ家々がつづく田園であり、世界中から観光客が訪れるばかりでなく、イギリス人にとっても「いつかは住みたい」農業地帯とされている。引退したらコッツウォルズに移住して農園を営むことが、イギリス人の中産階級のステータスとなっている。コッツウォルズ訪問期間は2009年8月12日～15日とした。

研究1

図1-1 コッツウォルズ周辺（小野、2006より引用）



3. ナショナル・トラスト制度

(1) ナショナル・トラスト制度の背景と歴史

1) 「美しい田園を守りたい。」立ち上がった3人の市民

ナショナル・トラストは、1895年に英国で生まれた住民主導による自然環境や歴史的遺産などを守る活動である。正式名称を **The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty**（「歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト」）という。ここでの **National** とは“国家の”“国立の”という意味ではなく“国民の”という意味である。

18世紀から19世紀にかけての英国では、産業革命と平行して農業革命が進行し、都市住民の食糧を確保するために郊外の開放農地や共用農地の囲い込みが行われていたが、19世紀後半になると、都市住民の間での自然志向が強まり、わずかに残された共用地をレクリエーションのための開発用地にと確保する動きが強まった。美しい田園風景が次々と失われ、歴史的建造物が新たな開発のために取り壊されてゆくことを憂えた3人の市民運動家—弁護士のサー・ロバート・ハンター（1844-1913）、社会事業家で女性運動家のオクタビア・ヒル（1838-1912）、牧師のハードウィック・ローンズリー（1851-1920）—が、開発に対抗して自然や歴史遺産の保護のために土地を確保しようと立ち上げたのが、ナショナル・トラストである。この運動の構想を作ったのはハンターである。国民の共通の利益のために、共用地を保護する土地所有団体を作ろうという明確な構想を彼は1884年にはすでに持っていた。数々の著名人を設立メンバーに迎え、初代会長をハンターが務めて1895年1月12日に正式に立ち上がったのである。

2) 英国最大の土地保有機関

ナショナル・トラストは、立ち上がるると同時に多くの賛同者を得て、瞬く間に成長した。ピーター・ラビットの著者として知られているベアトリクス・ポターも、ナショナル・トラストの理念の支持者のひとりで、彼女が湖水地方に所有していた農場や家など多くの物件がナショナル・トラストに提供された。1907年には「ナショナル・トラスト法」が成立し、ナショナル・トラストの目的は、「美しい、あるいは歴史的に重要な土地や建物を国民の利益のために永久に保存する」こととされた。トラストによって取得された資産は第三者に譲り渡してはならず、抵当に入れてはならないことになり、寄贈者は、安心して財産をナショナル・トラストに託することができるようになった。マナーハウスと呼ばれる領主の館やその庭園、産業遺跡などもナショナル・トラストで保存できる物件となった。

2009年現在、ナショナル・トラストは2500平方キロメートルの土地、1,141kmの海岸線、350以上の施設を所有しており、英国最大の土地保有機関となっている。

3) 最大の会員数を誇る NGO

ナショナル・トラストは1分ごとに一人の会員が増えていると言われ、2009年現在340万人を超えている。入会案内によると、「個人47.5£/大人2人79.5£/家族①大人2人と18歳以下の子ども82£/家族②大人1人と18歳以下の子ども62£/若者（13歳～25歳）21.5£、子ども（13歳以下）21.5£」という会員種別となっており、「生涯会員になることもできます」という注釈がつけられている。英国人には子どもの誕生記念に「生涯パス」を贈る家庭もあり、生まると同時にナショナル・トラストとの関わりが始まる国民も少なくない。その結果として、世界最多の会員数を誇る NGO となっている。

(2) ナショナル・トラストの維持管理

ナショナル・トラストは公開が義務付けられており、上記の2500平方キロメートルのうち820平方キロメートルが一般の人々が利用できる土地となっている。マナーハウスや修道院のように、かつては一般人が立ち入ることなどできなかった歴史的建造物等に、来訪者は入場料を払えば入ることができる。

ナショナル・トラストの対象施設は、入口やパンフレットなどに共通のロゴマーク(図1-2)がつけられており、一見してわかるようになっている。一方で、公開施設の維持管理は課題のひとつである。建造物は寄贈時と同じ状態を保つことが求められているが、不特定多数の来訪者の立ち入りが続けば施設や空間へのダメージは当然増え、そこへ老朽化も加わる。

補修、修復や日常的な手入れ、植物の植え替え、掃除などの作業にあたる実際の労働力は、年間のべ4万7000人に上るボランティアであり、ボランティアの運営はナショナル・トラストの重要な業務に位置づけられている。ナショナル・トラストの会員になると、会報などと共に各地のトラスト物件で発生するボランティア募集情報が送られ、希望すれば誰でも参加することができる。年間260万時間分の労働がボランティアによって賄われている。仕事の種類は施設の補修や発掘作業、施設管理、ガイド、イベントのアシスタント、ガーデニングなど約180種類に及ぶ。子どもの時から身近にナショナル・トラストの存在があることから、恩返しとして参加する人も多い。また奉仕の精神を説くキリスト教の土壤があることから、ボランティアはイギリス国民の文化になっている。

海外からのボランティア参加も認められており、ワーキング・ホリデーとして毎年約450のプログラムが実施されている。2日から1週間単位で10人前後のグループを組み、ホステル・タイプの宿泊施設に泊まって自炊しながら環境保全活動に参加する。参加資格年齢は16歳以上で参加費用は一週間65ポンド前後からとなっている。

維持コストには、入場料やナショナル・トラスト・ショップでの販売物の売り上げ等が活用されている。

図1-2 ナショナル・トラスト ロゴマーク



(3) ナショナル・トラストの実態

1) ナショナル・トラスト施設

ナショナル・トラストの対象施設(プロパティと呼ぶ)には、図1-3に示すようにいくつかのカテゴリーに分かれている。

図 1-3 ナショナル・トラストのプロパティのカテゴリー

歴史ある邸宅・城・教会・聖堂・修道院・風車・遺跡・産業遺産・農場・庭園・公園・カントリーサイド・海岸・自然保護地域等に区分されている。(破線内)



(出典：The National Trust, 'Handbook for members and visitors 2009' (入会案内書))

現地調査では上記のうち歴史ある邸宅、修道院、庭園の3種類のナショナル・トラストを訪れた。以下がその概要である。

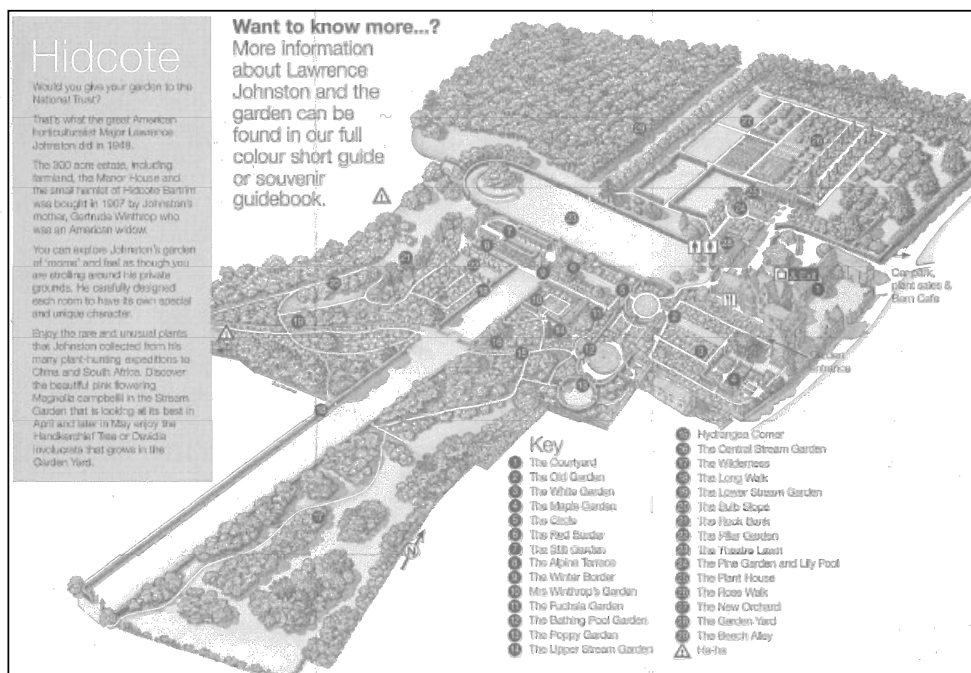
a. ヒドコート・マナー・ガーデン (邸宅・庭園) (写真 1-1・図 1-4)

300 エーカーに及ぶ農園・庭園付き邸宅で、イギリスの代表的な庭園の一つに数えられている。1907年にこの邸宅を手に入れたイギリス人(元アメリカ人)、ローレンス・ジョンストンが、約30年の月日をかけて12名のガーデナーと共に28の区画に分かれた庭園を整備したものである。1947年にナショナル・トラストに寄贈された。庭園はアーツ・アンド・クラフト様式と呼ばれているが、28の区画はどれも二つとして同じものがない。トピアリーや噴水なども活用し、遊び心にも富んでおり、年中を通じて移り変わる草花の美しさとともに趣向を凝らして飽きることがない。園内の小径はどこも人であふれている。ガーデニングはボランティアによって行われている。

写真 1-1 ヒドコート・マナー・ガーデン



図1-4 ヒドコート・マナー・ガーデン



b. スノウズヒル・マナー・ハウス (邸宅) (写真1-2)

821年から1539年までウィンチコンブ修道院として利用された建物で、その後様々な所有者を経て1919年に建築家チャールズ・パジェット・ウェイドが最後の所有者となった。現在残る建物は、15世紀から16世紀にかけて建てられたもので、コッツウォルズ独特の石によって建造されている。ユニークなのはその家に納められた数々の所蔵品である。クラフトマンでもあったウェイドは世界中の様々な「もの」を骨董市や仲買人から多数買い付けては家に置いた。例えば「地球儀」なら地球儀でおもちゃのジャイロスコープから巨大な地球の模型まで、といったように、一つのキーワードのもとで多様な時間があれば修理をしたり配置換えをしたりした。博物館にはなくてもスノウズヒル・マナーに行けば見られるもの等も多く、学生や研究者が研究目的で訪れることもある。1951年登録。

写真1-2 スノウズヒル・マナー・ハウスのコレクション



(出典: *The National Trust (1998), Snowhill Manor*)

c. レイコック修道院と周辺の村（修道院・集落）

（写真 1-3）

13 世紀に建てられた修道院と、その周辺の中世の面影を残す村全体が指定されている。修道院は映画「ハリー・ポッターと賢者の石」のロケ地として利用された場所である。開口部から差し光と柱が絶妙なコントラストを描くギャラリーは荘厳な雰囲気醸し、タイムスリップしたような錯覚にとらわれる。村の建物もどれも古く、16 世紀から 18 世紀に建てられたものばかりである。軒は低く店は構えが小さく、物語に出てきそうなかわいらしい町並みである。

写真 1-3 レイコック修道院



（4）日本のナショナル・トラスト制度との比較

英国のナショナル・トラスト制度は今や世界各国に模倣導入されている。日本では、1964 年に鎌倉・鶴岡八幡宮の裏山での宅地造成計画への反対運動として、英国の制度に感銘を受けた作家・大佛次郎を中心に「鎌倉風致保存会」が設立され、土地を買い戻したのが最初である。その後「天神崎の自然を大切にす会」（1974 年）、「知床 100 平方メートル運動」（1977 年）等が組織された。現在、日本には、主として自然環境や土地の確保に取り組む各地のナショナル・トラスト運動団体をメンバーとする「社団法人日本ナショナル・トラスト」と、歴史的建造物の確保を目的とする「財団法人日本ナショナル・トラスト協会」の 2 つの組織がある。それぞれに加盟するナショナル・トラストの施設や空間は、個々の友の会やファンクラブなどによって維持管理されている。

イギリスと日本のナショナル・トラスト制度の最も大きな差異は、制度創設の背景にあったねらいの違いである。イギリスのナショナル・トラストが、価値ある施設の保存と公開を重視しているのに対し、日本は目前に迫った開発や荒廃などの問題を抱えた土地や施設を救うことを主目的として始まっている。そのため、イギリスの場合は施設や土地の持ち主が国民に寄付をするところが出発点となるが、日本の場合は土地の取得のために国民に協力を仰ぐ運動＝ナショナル・トラスト運動となり、土地の取得が完了した時が目標達成時となる。この差異は、土地の確保後の活用の違いにも現れている。イギリスのナショナル・トラストは、一般公開やボランティアという仕組みによって本来は見ることも触れることもできなかった施設に誰もが入ることができ、教育や研究にも寄与している。これに対して上記の鶴岡八幡宮の裏山などは、開発から守るという当初の目的が達成された後、その場所を国民のために開放し教育に利用するという発想に立っているわけではなく、むしろ手を触れない聖域として保存する意識の方が強いといえる。

このことは、プロパティも会員数も増加傾向にあり、国民の日常文化に浸透しているイギリスのナショナル・トラストと、いくつかの場所と固定ファンの開拓にとどまっている日本との違いとなって顕れているといえよう。

4. フットパスと「歩く権利」

（1）通行権とフットパス（写真 1-4）

イギリスでは「通行権」（通称：歩く権利, **Wailing Rights**）が歴史的慣行として昔から存在していたが、1949 年に法律で規定され、1968 年の法律でほぼ確立された。さらに 2000 年に施行された「田

園地域および通行権に関する法律（Countryside and Rights of Way Act 2000）」のもとで、「権利通路」が確定された。同法に従い、自然歩道は政府の田園地域委員会の管轄下におかれ、地方自治体や農業者の協力により維持管理されるしくみとなっている。慣習法として存在していた通行権とは、「公道法（Highways Act）のもとに20年間にわたって公衆が通行し、土地所有者が異を唱えなければその道は誰もが通行する権利を有する」、というものであったが、権利の判断基準が「慣習」であることから権利が明確ではなく、土地所有者とのト

ラブルの原因となるばかりであった。その法律を改良し、通行権を有する道を明らかにしたのが1949年の「国立公園及び田園地域アクセス法」（The National Parks and Access to the Countryside Act 1949）に基づく施策であった。その後田園地域法（1968）、野生生物及び田園地域法（1981）、通行権法（1990）と何度かにわたる法改正を繰り返し、最近行われた改定が上記2000年の法である。

2000年改正法では、「散策権」が新たに設定され、「権利通路」が設けられていなくても、指定されたアクセス・ランド内であれば公衆が通行できること（ただし徒歩のみ）となった。散策権が設定されるアクセス・ランドは年間最大28日まで閉鎖期間を設けることができる。この点が、通行権によって通年の通行を前提とする権利通路との違いとなっている。

これらの法律の背景にあったのは、自動車優先社会に転換する中で、排気ガスや騒音を避けて歩くことの楽しみや、田園地域の風景を楽しむことを重視する人々による運動であった。それによって守られた権利が今日、イギリスをしてウォーキング大国、フットパスの発祥地などと称される状況を生み出したのである。

(2) フットパスの種類

田園風景や美しい景観地を楽しむしかけとして、通行権のもとに設定された「権利通路」は、上記法のもとに「パブリック・フットパス」「パブリック・ブライドルウェイ」「バイウェイ・オープン・トゥ・オール・トラフィック」「リストラクティッド・バイウェイ」「パーミッシブ・パス」の5種類がある。

①フットパス（Footpath）：徒歩のみで通行できる道。農村地域では100年以上にもわたって利用されて続けてきた道も少なくない。目印は金属またはプラスチックの丸い板に黄色の矢印が描かれている。

②パブリック・ブライドルウェイ（Public Bridleway）：徒歩、乗馬、自転車のみで通行できる道。金属またはプラスチック製の丸い板に青の矢印が描かれている。

③バイウェイ・オープン・トゥ・オール・トラフィック（Byway open to all traffic）：重荷徒歩、乗馬、自転車で利用するが、バイク、自動車の通行も認められる。目印は金属またはプラスチック製の丸い板に赤色の矢印が描かれている。

④リストラクティッド・バイウェイ（Restricted byway）：暫定的に設けられた道で、徒歩、乗馬、自転車や馬車などで利用できる道である。

写真1-4 フットパスを歩く



(3) フットパスの利用の実態

コッツウォルズでは網目のようにきめ細かくフットパスが張り巡らされ、自分が行きたい場所にフットパスを使って行くことができる。ナショナル・トラストとフットパスは連携が行き届き、点在するナショナル・トラストのプロパティをフットパスが結んでいると言ってよい。マナーハウスは、施設にいたるまでの道だけでなく邸宅内もフットパスとして認められ、庭園を横切って次のナショナル・トラストに至る道も確保されている。

現地調査ではボートン・オン・ザ・ウォーター (Bourton on the water) からローズ・オブ・マナー (The Lords of the Manor House) に至るフットパスを次頁に述べる AONB によるガイド付きツアーで通行した。利用したフットパスは、集落内、牧場内、一般車道などを結んでおり、道の形状や幅は変わりながらも統一したフットパスのサインによって連続性が担保されていた (写真 5-③)。交通量が多い車道の脇を歩くこともあったが、歩道のみ場所がほとんどであり、景観のよい、まさに歩きたくなる道が設定されている印象であった。

牧場内のフットパスはところどころにゲートが設けられているが、それらは人よけではなく牛馬が逃げ出すのを防ぐためのものであった。フットパスの維持管理には地域のボランティア団体が関わり、これらのゲートにはフットパスのロゴマークプレートやシールが貼られ、この道が人々によって造られ、守られている道であることを示している。(写真 1-5)

写真 1-5 フットパスのサイン



① パブリック・フットパスのサイン



② 所々に設けられたゲート



③ フットパスの印の緑の矢印

(4) 特別自然美観地域 (AONB: Area of Outstanding Natural Beauty) 指定

コッツウォルズ地方は、1966年に特別自然美観地域(以下AONBと略す)に指定され、政府ではなく地方議会による管理が行なわれることになった。AONBの目的は、自然景観美を保存・改良していくことと、カントリーサイドに働く人々や住民の利益を尊重することである。AONBは、フットパスの根拠法である先述の「国立公園及び田園地域アクセス法」(1949)に基づいて設定されており、2000年に制定された「田園通行権法」によってさらに権限が強化されて国立公園同等の権限をもつとされている(小野、2006)。2004年12月にはコッツウォルズのAONBの環境保護権限を強化するために、コッツウォルズ環境保護局(Cotswolds Conservation Board)を設立し、コッツウォルズの環境保護を専門とする政府機関として活動を開始した。保護局の具体的な仕事は、①保全活動のための資金確保、②公共交通機関のブックレット発行、③伝統的技術や作業の調査や復活に努める地元住民への支援、④持続可能な地元農業の支援、⑤年2回の機関誌の発行、⑥ドライブストーンによる塀作りやヘッジレイアウトの協議会、⑥コッツウォルズボランティア監視員の仕事の支援、等である。

コッツウォルズ・ボランティアとしてAONB下にある活動には、フットパスを利用したガイドツアーのガイド等もある。本調査で踏査したフットパスは、AONBのボランティアによるガイドウォークであった。ガイドウォークはほぼ月1回開催され、新聞等で参加者募集があり、誰でも集合時間・場所に行けば歩くことができる。5時間程度のウォーキングで、途中で食事をしたりお茶を飲んだりしながらコースを辿る。調査実施時は13名の参加者があった。近隣住民もいれば、車で2時間かけて来たという参加者もいたが、健康づくりや歩くことが好きだから、コッツウォルズが好きだから等の理由で楽しみに訪れた人々であった。

(5) 日本におけるフットパス

日本でも、イギリスのフットパスを真似て各地域の魅力的な景観ポイントを結んだフットパスが誕生し始めている。主たるものとして日本フットパス協会の設立と北海道内でのフットパス整備の動きある。

日本フットパス協会は2009年2月に設立されたネットワーク組織である。協会のHPには、活動概要として次のように記されている。

「私達が行っているフットパス活動は、「森林や田園地帯、古い街並みなど、地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径(こみち)【Path】」の整備を通じて、地域の魅力を地域自身が再発見・創造し、それをウォーキングを中心にした現地での体験・交流の中で来訪客に感じていただく、まさに今求められている地域・観光のあり方を体現しています。さらに、フットパスはありのままの風景を楽しむことを主眼として整備・修景するため、交通インフラや施設整備への大きな負担がなく、多くの地域において応用可能な地域振興策といえます。フットパスこそ、日本の新しい観光の柱であり、地域活性化の有力な手段と考えます。」

すなわち、フットパス整備のねらいに、単に歩くことを楽しむ場を提供するだけでなく地域振興効果を含めていることが日本のフットパスの特徴である。同協会は自治体を会員としており、現在のところ北海道黒松内町、山形県長井市、東京都町田市市の3自治体が加盟している。市長が協会長を務める東京都町田市は、駅周辺の一部地域を除けば多摩丘陵の一部を構成する谷戸地であり、谷戸地形を使った伝統的な農地管理によって美しい田園風景を保ってきたエリアが広く残されている

る。「NPO 法人みどりのゆび」が、地権者と相談しながら設定し、田園を歩く楽しみを提供するマップを作成してきたことが、フットパス整備や協会設立の背景となった。特別な資源があるわけではないが、見晴らしのよい道、曲がりくねった田舎道などを結んでいる。所々にあるサインボードには、美しい風景を維持してきてくれた農家に感謝しよう、というコメントが記されている。

北海道内では洞爺湖を始め十数地域でフットパスの整備が進んでおり、それぞれの地域の特徴を活かし、風景を楽しむコースづくりやガイド育成等が行われている。洞爺湖フットパスは、これまで立ち入り禁止とすることが多かった有珠山周辺の散策路が設定され、火山学者らが講師となってガイドの養成制度（火山マイスター）も立ち上がり、新しいスタイルの洞爺湖エコツアーが誕生している。

いずれの地域も、近年の日本の観光では忘れられていた「風景を楽しみながら歩く」ことを提唱しており、イギリスのフットパスの概念とよく似た活動が展開されていると言えよう。一方で、牧場などの有地内の通行が公的に認められているイギリスと違い、農地の多くが田畑で、農地内の歩道が畦畔（けいはん）しかない日本（とくに本州）では、農家との調整が難しく、利用ルールの設定が重要である。また歩車道の分離が必ずしも容易ではなく、ハード整備が追いついていない地域があることも特徴である。

5. 観光資源の持続的維持管理に関する考察

(1) 美しい風景・価値ある施設を楽しむしかけづくりの重要性

ナショナル・トラストのプロパティもフットパスで訪ねる場所も、必ずしも世界遺産級の著名な観光資源ばかりではない。むしろ田園風景や農地、貴族の邸宅など、イギリス各地の生活文化や歴史に根ざした地域資源を訪ねる価値ある宝として評価し、市民に開放しようという意識（ナショナル・トラスト）や、歩くことそのものを楽しもうという意識（フットパス）がこれらのしゅみを支えている。自分たちの日常に誇りを持ち、価値を評価することから始まっている。いずれも一石二鳥に作られたしゅみではなく、ナショナル・トラストは1世紀半以上、フットパスも半世紀以上に亘る歴史的背景を背負っている。いずれも市民運動や慣習から成立し、制度化され法的裏付けを獲得したものであり、市民社会のひとつの成熟の姿と言えよう。現在、ナショナル・トラストへの観光客数は年間1,400万人を超え、間違いなくイギリス観光の重要な資源となっている。教育効果等を通じて文化の深化や熟成にも貢献するなど、イギリス国家にとっても多大な効果をもたらしていると言えよう。

(2) 一般公開とボランティア文化の醸成

イギリスのナショナル・トラストは、イギリスにボランティア文化を根付かせる大きな要因となったと言ってよい。いくつかの要因が考えられる。

- ① 土地や施設の「取得」を第一目標としがちな日本のナショナル・トラストと違い、所有している施設や空間を寄付として差し出し「公開」することを目標としていること。個人の所有を手放し、公開に供することによって多くの人に歓迎されるというしゅみが顕在化している。
- ② 国レベルの組織（The National Trust）が統括管理していることから、収益構造が明瞭であり、利用者の支払う入場料やショップの売り上げ等が各物件の維持やボランティアワークを支えていることがわかりやすい。
- ③ ボランティア募集情報が随時公開され、個人の力が著名な施設や庭園等の維持に直結していることが実感できる。参加者にとっては学びの機会となる。

このことは企業等の寄付を募る上でも共通するポイントとなっており、チャリティそのものをサービスとして提供する新しい考え方も、ナショナル・トラストを基盤として育ちつつある。

(3) 美しい景観を楽しむ文化

フットパスの存在は、日常生活の中にある身近な景観を楽しみやすくするしかけである。点的に存在する資源を安心して歩くことができる道で結び、セルフガイドで歩くことを可能にするだけで、観光体験や資源が生活の周辺で常態化され文化として根付いている。新しい地域資源と市民との関わりが創出されることにより、地域理解の深化や交流人口の増大にもつながっている。

6. まとめ—茅ヶ崎での展開可能性

以上のイギリスでの取組みをもとに、本学が存在する茅ヶ崎市北部における実現可能性検討してみる。茅ヶ崎市北部は関東平野の中にあって低標高の谷戸地形を形成しており、農地を数多く残している。大交通網から外れていることもあり、一部ルートを除けば交通量もさほど多いとは言えず、寺社や板碑等が点在する旧道がいくつも存在している。晴れていれば富士山が望める道や谷戸を抜ける道などもある。里山公園に代表されるように、季節ごとの都市生物の生息・生育を楽しむことができる場も存在する。だが、これら日常の風景に光が当たることは、これまでほとんどなかった。目的地に向かう通路を道ととらえるのではなく、歩くことを目的とした道の設定や、歩く道の途上にある無名の資源を評価する視点をもつことにより、茅ヶ崎におけるフットパスの設定や景観を楽しむ活動の展開は十分可能性がある。茅ヶ崎でフットパスの設定を行うには、まず、日常の価値を評価する視点の育成が必要である。ここに大学の役割があると言えよう。

研究2

本研究は英国コッツウォルズにおける実態調査を行い、その結果を検討することで、地域における観光者満足向上の試みを明らかにするものである。

1. はじめに

英国には数多くの有名かつ美しい庭園がある。それらの庭園は現在の英国市民にとっての憩いの場として、楽しみ場として、あるいは歴史を再認識する場として存在している。これらの英国庭園を見るために、海外から多くの観光者が英国を訪れている。訪れた観光者が満足し感動を覚え、再度訪れたいと考えるにはどのような要因が関わっているのだろうか、考えてみたい。これらについて考えるために、英国庭園の歴史とそれを創造した人物ならびにザ・ナショナル・トラストについて明らかにした上で実態調査の結果を示すこととする。

2. 英国庭園の歴史とそれらを創造した人物について

(1) 英国庭園の歴史

英国庭園の歴史は帝政ローマの属領「ブリタニア」時代の一世紀までさかのぼることができると言われているが、本研究では現在の英国庭園により多くの影響を与えたと思われる16世紀の庭園から明らかにしたい。

16世紀にキリスト教の伝播があり、修道院において聖職者たちによって庭園が造られた。修道

院では庭仕事は純粹で神聖な仕事とみなされ、有用な植物の栽培を中心としていた。庭園の役割は、①祈りと瞑想の場として、②食卓を飾る材料を供給する場として存在していた。①祈りと瞑想の場というのは、聖職者たちが庭を散歩しながら瞑想をするための場としての役割であった。②食卓を飾る材料を提供する場とは、庭園が自給自足を可能にするための菜園や果樹園、菓草園として作られていたのである。

キリスト教世界では、世界の創造者たる神とその被造物との間にはっきりした区別があり、神→人間→自然の順に階層的秩序が確立されている。人間は神が創造したものであり、人間と別の過程で創造した自然とは別のものであり、自然の一部でもない。このことからキリスト教において、自然を「他者」あるいは「外のもの」とする認識があり、自然は「外のもの」であるから、距離を置いて自然を客観的に眺め、自然を知的興味の対象として見ていた (cf. 中山, 2003) という。庭園は植物栽培や耕作をすることで実用的知識や技術を修得する空間としてとらえていたのである。

17世紀にはいると、自然を他者として支配するという理念が生まれ、農業改革が行われ、イギリス全土を楽園にしようとする試みが見られた。自然を他者として客体化して、そこに実験や操作を加えて、化学的に把握しようとしたのである。17世紀後半には英国では海外貿易が盛んになり、カリブ海や北アメリカなどの英国の大規模農園で造られた植物や果樹など海外の珍しい植物をイギリスに持ち帰り、植物園、果樹園、個人庭園で研究、栽培するようになった。また王立協会¹⁾などが、植物栽培、植林、植物研究などの活動の支援を行った。植林運動が進むことで、家屋建材や燃料などの確保という実用的な目的だけでなく、庭園の自然的景観が向上することで自然風庭園のすばらしさが人々に認められていったのである。

また、17世紀初頭に誕生したカントリーハウスは上流社会の人々が自らの領地につくった広大な家であり、彼らはそこに広大な庭を作った。その庭には2つの種類、パークとガーデンがあった。パークは、森や林が広がっており、領主が狩猟をおこなった場所である。これに対してガーデンは、花や樹木を植えてきちんと配置された庭のことを指していた。また、比較的素朴でイギリスの古い伝統を体現したカントリーハウスをマナーハウス、荘園屋敷といった。領地全体の自然風景の中に建物も庭も溶け込んでおり、家のそばにある花園と果樹園からなる庭で、比較的質素な趣きをもっているものを指している (小林, 1998)。

(2) 英国風景式庭園

英国風景式庭園は1730年頃から1820年までの100年に作られた。この誕生の背景には植林運動によって自然風庭園の素晴らしさが人々に認められたことに加えて、フランスがカトリックの専制君主国であるのに対して、英国はプロテスタントの自由の国であるという対抗意識から英国独自の庭園が作られるようになったといわれている。

英国風景式庭園は17世紀のフランス幾何学式庭園に対抗した英国独自の広い貴族の庭であった。自然の地形を生かし、起伏する芝生と湖、点在する樹木からなり、そこに古典様式の神殿やゴシックの寺院廃墟が点景物として置かれていた。したがって、英国風景式庭園は西洋の庭園の歴史の中でただひとつの非整形庭園であった。古典文化やルネサンス文化、英国の中世ゴシック文化に対する趣向と結びついており、文化を内包した庭園でもある。整形式、幾何学的、規則的という特徴をもつ整形式庭園と比較して、英国風景式庭園は、非整形式、自然風、不規則的という特徴をもつ (岩切, 2008)。

これらの英国風景式庭園はどのような人物によって創造されたのか次節で明らかにする。

(3) 英国風景式庭園を創造した人物

英国風景式庭園を創造した人物として、チャールズ・ブリッジマン (Charles Bridgeman, 1690-1738)、ウィリアム・ケント (William Kent, 1685-1748)、ランスロット・ブラウン (Lancelot Brown, 1716-1782)、ハンフリー・レプトン (Humphry Repton, 1752-1818) をとりあげる。加えて十九世紀の英国庭園を造りだした人物としては、ジョン・クロード・ラウドン (John Cloudia Loudon, 1783-1843)、ウィリアム・ロビンソン (William Robinson, 1838-1935)、ガートルード・ジーキル (Gertrude Jekyll, 1843-1932)、ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) を取りあげ、簡単に説明したい。

チャールズ・ブリッジマンは造園家であり、英国を代表するストウ庭園などの名園を多く作りだした。非対称型庭園を作成し、自然主義的風景の風景式庭園を英国庭園デザイン形式の庭園として作成した。また、かれはハーハー (Ha-Ha)²⁾ と呼ばれる庭園技法を考案した。この技法は庭園内の内と外の風景をつながってみえるように、空掘をつくり、動物の侵入を防ぐとともに、低木などを植栽して空掘りを隠し、庭園と自然風景とを一体化させる役割をもっていた。バッキンガムシャーにあるストウ庭園を改修し、その際に整形形式庭園に自然風景を取り入れるとともに、非整形形式庭園を作成したことで、全く新しい形の英国庭園を造ることになった。ストウ庭園は現在ナショナル・トラストに管理されている。

ウィリアム・ケント (1685-1748) は歴史的風景画家であり、イタリアに修業にでかけ、その間に庭園を見学し、知識を得た。彼の作る庭園は、着想が独創的で軽快であると言われている。ケントは、風景画を描くように庭園を造った。つまり散策するにつれて風景画が連続して立ち現れる庭である。その風景画のモデルとなったのはクロード・ロラン³⁾ の歴史的風景画であった。

ケントはイタリアの庭を模倣するのではなく、イギリス独自の庭造りを行った。庭の随所に古代ローマやイタリア・ルネッサンスの世界を思わせる点景物、アポロやヴィーナスなどの彫像、休憩のために使う園亭としての小さなローマ神殿などを配置し、イタリアの庭にある段々滝や噴水、あるいは野外劇場を造った。このような庭園を造ることで庭園を歩く人がロランの絵のような歴史的風景画を見ているような気分になれるのである。これらに加えて、英国の農牧の風景を加え、さらに英国中世のゴシック建築の廃墟のような建物、中世から使われている村の橋に見えるように、樹を切るなどをした。このように庭の中に古代ローマ、イタリア・ルネッサンスそして英国中世のゴシック建築と英国の農牧の風景を加えたことによって英国風景式庭園を創出したといわれている。ケントが作成した庭としてはロウシャム・ハウス (Rousham House) の庭園が有名である。ロウシャム・ハウスの庭園からは、隣の畑を見ることができる。ケントはブリッジマンとの協力や引き継ぎで造園も行っていた。

このロウシャムの庭園と同じ時期に、素人造園家によるピクチャレスクの庭園が作られていた。作成された庭園の数は少ないもののこの流れは18世紀末まで続いた。点景物はケントの庭園に比べて少ないものの洗練度を増し、絵のような、絵のように美しいの意味でピクチャレスクの庭園と呼ばれた。ピクチャレスクの庭園は単なる田舎の景色や自然の山岳ではなく、歴史や文化を連想させる建造物を含むことが条件とされていた。そのピクチャレスクの庭園の代表的なものが、ヘンリー・ホア (Henry Hoare) 一世、二世が作成したスタウアヘッド (Stourhead) である。現在はナショナル・トラストが管理している。

ランスロット・ブラウンは庭師として修業をはじめ、1741年にストウ庭園に雇われ、ここでウィリアム・ケントの下で10年働いた。彼が作成した庭園として有名なものは、チャッツワース

(Chatsworth) と世界遺産にも登録されているブレナム・パレス (Blenheim Palace) があげられる。地形を生かし、土木工事によって美しく造形し、川をせき止めてなだらかな曲線を見せる湖を造り、起伏する芝生にオークやブナを配置し、庭園の境界を樹木の帯で囲った。鹿園や放牧地を取り囲んだ造園を行ったので、鹿や牛、羊の姿が見られた。時には風景に邪魔になる農家を撤去し、村全体を取り払うことも行った。境界を樹木の帯で囲むことから、ブラウンの造った庭は閉じた庭であった。また、所有地の内、放牧地や鹿園だけを庭に繰り入れるため、彼の庭は緑の世界であった。彼は風景は改良 (ケイパビリティ) の可能性があると言っていたことから別名「ケイパビリティ・ブラウン」とも呼ばれた。170 の庭を改良し、その風景は自然そのものと思われるという評判を得ていた。

ハンフリー・レプトンは、ランスロット・ブラウンの次の世代に属する英国の代表的庭園家であり、彼によって風景式庭園 (landscape gardening) という言葉が創案された。彼は庭園改造の際に完成前と完成後の風景画を描き、赤い表紙を付けたレッド・ブック (庭園改造計画書) を施主に示したことで有名であった。彼の手がけた庭園は、その多くがランスロット・ブラウンの手がけた庭園の改修であった。風景式手法をとりながらも、ブラウンが排除した幾何学部分として花壇 (装飾庭園)⁴⁾ などを復活させ、変化に富む庭園に仕上げた。また、レプトンは湖よりも川を重視し、風景園に花壇がおかれることもあり、緑一色の庭園ではなかった。また、庭を閉じていた樹帯を取り除いたことで、風景園を庭の外の風景に連続させた。そのため景観を損なうとされた工場や労働者住宅などは樹群で隠すという操作を行った。彼が作成した庭はおよそ 400 庭あったとされている。

十九世紀の庭園の特徴は、施主が中産階級になったこと、園芸趣味を満たす庭園になったことがあげられる。ピクチャレスクの庭園に対抗して、ガードネクスト様式と呼ばれる庭園が生まれ、その中心人物がジョン・クローディアス・ラウドンであった。彼の造る庭は、庭の植物が自然なままですぐ最適の条件で植える、園芸家の腕を示す庭らしい庭造りを目指した。整形式と風景式の混合庭園であった。

園芸家であるウィリアム・ロビンソンはガードネクスト様式で行われていた派手なカーペット・ベディング⁵⁾ に強く反発し、イギリスの土壌と気候に合った自然な木、花、多年草を使い、自然な庭造りを追求した。さまざまな花を花壇だけでなく、散策路、生垣、ボーダー⁶⁾ に植えたり、石塀や石壁に這いあがらせるなどを提案した。

ガートルード・ジーキルは園芸家、作家、画家でもあり、ロビンソンとも交友をもっていたこともあって、従来の英国風景式庭園よりも自然風の植栽とイギリスの樹木を用いて庭園を造った。彼女は庭園を連続した絵画であると考え、庭に緩やかながら一定の構造的性を与え、ボーダー花壇も創出した。とりわけマンステッド・ウッドの庭園では4つのボーダーが造られ、帯状の形態の中で絶妙な色彩の流れを創出した。彼女にとって庭は憩う場所であり、美しい色の絵を楽しむところであった。彼女のカラー・スキーム理論は現代の英国庭園に大きな影響を与えている。ジーキルはアート & クラフツ運動の影響を受けており、庭にもその影響が反映されている。アーツ & クラフツ運動 (Arts and Crafts Movement) とは、工場生産が進み、都会生活が中心になった時代の反省として起こった運動であり、都会より田舎、人口より自然、機械生産より職人仕事、現代より中世、派手さ・華美より質実や落ち着いたき、規模より良質さに価値を置き、家具や工芸品、室内装飾、さらに家や庭を造った一連の運動である (岩切, 2008)。

ウィリアム・モリスは詩人、思想家、デザイナーであり、アーツ & クラフツ運動を推進した中心人物である。ヴィクトリア朝時代、産業革命の結果として大量生産による安価で粗悪な商品があ

ふれていたことから、モリスはこの状況を批判して、中世の手仕事に帰り、生活と芸術を統一することを主張した。モリスの生活と芸術を一致させようとする思想は様々な分野に影響を与えた。モリスが自分の家に作成した庭は、イギリス固有の植物を使った庭であり、実用性も高く、子供たちの遊び場として、友人と憩う場所でもあった。アーツ & クラフツ系の建築家が設計する庭は、庭を建物の続き、戸外の部屋とみる、庭は相互に生垣や石塀で区切り、それぞれ異なる趣にするなどの特徴があるとされる。

3. 英国庭園とザ・ナショナル・トラスト

ザ・ナショナル・トラストの正式名称は“The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty”であり。英国の美しい自然や貴重な歴史的建造物を市民に寄付や寄贈によって修得し、保存、管理、公開することを目的とした民間のチャリティ組織である。その誕生は1895年弁護士のリバート・ハンター (Sir Robert Hunter)、社会活動家のオクタヴィア・ヒル (Octavia Hill)、湖水地方の環境保護運動の先駆者の役割をはたしていたハードウィック・ローンズリィ (Canon Hardwicke Drummond Rawnsley) の3人の市民運動家によって、市民のための憩いの場としての自然景勝地、および歴史的名勝地を修得し、後世に残すことを目的として作られた (詳細は研究1を参照のこと)。ナショナル・トラストの保存対象は、あらかじめ破壊が懸念される景勝地や歴史的建造物であり、現在保有する保護資産 (プロパティ) はイングランド、ウェールズ、北アイルランドに300以上の歴史的建造物や庭園、古代から残された森林や村落などの景勝地、農村地帯など、多岐にわたっている。

4. 実態調査

実態調査で訪れた英国庭園のヒドコート・マナー・ガーデン (Hidcote Manor Garden)、スノーヒル・マナー・ガーデン (Snowhill Manor & Garden)、キフツゲート・コート・ガーデンズ (Kiftsgate Court Gardens) について、明らかにしたい。

(1) ヒドコート・マナー・ガーデン

ヒドコート・マナー・ガーデンはコッツウォルズ地方のチップング・カムデン (Chipping Campden) から車で北へ20分くらいのところに位置する。1948年にナショナル・トラストに譲り渡され、それ以来ナショナル・トラストが管理している庭園の一つである (写真2-1)。この庭園はアーツ & クラフツ運動も影響を受け、20世紀を代表する庭園の最高傑作とされている。

写真2-2 自然園の小道



写真¹¹⁾ 2-1 ナショナル・トラストの認証



この庭園は1907年からアメリカ人のローレンス・ジョンストン (Lawrence Johnston) が約30年をかけて作ったものである。ジョンストンと彼に雇われた12名の庭師によって作成され、その後の英国の他の庭づくりに最も影響を与えたと言われている。ジョンストンはこの庭園を、「整形的な土台 (庭園)」という要素と「ワイ

ルドな庭（自然園）」という本来矛盾する二つの要素を取り入れて作成した。この庭園はさまざまな様式の庭園が美しく演出されており、庭園ごとにテーマが異なり、その雰囲気も異なっている。それぞれの庭園は「戸外の小部屋（outdoor rooms）」あるいは「コンパートメント（compartments）」と呼ばれている。小部屋といっても「整形的な土台」があるので、雑然とそれらの小部屋がくっつき合っているのではなく、小部屋の連鎖には整然とした規則性があるとともに意外性をもっている来訪者を飽きさせない。「ワイルドな庭（自然園）」は、ジョンストンが集めた樹木や灌木、草花が森の姿を模して植えられており（写真 2-2）、その間に小川がある。

ヒドコート・マナー・ガーデンは「ヒドコート・ブルー」と言われる門（写真 2-3）を通っていくと左側に庭木を彫刻的に仕立てた装飾刈り込みであるトピアリー⁷⁾がアクセントになっているホワイト・ガーデン（写真 2-4）、ジョンストンが最初に手がけた庭園であるオールドガーデン（写真 2-5）、レッドボーダー、ウインター・ガーデン、200 メートルあるロング・ウオーク・ガーデン（写真 2-6）、小さな池があるプール・ガーデン（写真 2-7）、赤系統の植物だけを集めたレッド・ボーダー・ガーデン、不思議な空間をつくっているシンメトリックなスティルト・ガーデン、ピラー・ガーデン（写真 2-8）など全部で 10 個の小庭がある。

写真 2-3 ヒドコート・マナー・ガーデンの入口



写真 2-4 ホワイト・ガーデン



写真 2-5 オールド・ガーデン



写真 2-6 ロング・ウオーク・ガーデン



写真 2-7 プール・ガーデン



写真 2-8 ピラー・ガーデン



小庭はオールドガーデン、ホワイト・ガーデンなどをはじめとする植物と花の色彩を核に構成された簡素で暖かみのある平面的な庭であるアーツ & クラフツ系と、噴水や水盤も使われている立体的なイタリア整形庭園系に分けられている。庭には、庭園の製作者が見てほしい景色にむけてシートが置いてある（写真 2-9、2-10）。

写真 2-9 庭のベストビューポイント
をみるためのシート



写真 2-10 庭のベストビューポイントを見
るためのシート



ヒドコート・マナー・ガーデンは、2月の末から12月の初旬までオープンしている⁸⁾。レストランでは10:00からモーニングコーヒー、ランチとアフタヌーンティが、カフェでは軽食とスナックが10:00から17:00まで提供されている。またナショナル・トラスト・ショップではバラエティに富んだお土産を買うことができ、庭園にある植物も購入することができる。点字のガイドや日本語のガイドも常備している。駐車場に隣接してピクニックエリアがあり、家族が景色や庭園を見ながらピクニックをすることもできる。夏にはボランティアガイド (garden steward) による植物や庭園の歴史などの話をしてくれるサービスがある。

ジョンストンが庭園づくりに着手してから2007年で100年を迎えたことを記念して、隣接する教会を改装して、ジョンストンの偉業をたたえる展示会が開催されている。ナショナル・トラストによって寄付が集められ、およそ60万ポンド（約1億5000万円）が集まり、それを使った庭園を復元する事業が2006年より開始されている。完成は2010年を予定している。

(2) スノーヒル・マナー & ガーデン

スノーヒル・マナー & ガーデン（写真 2-11, 2-12）はウースターシャー（Gloucestershire）との州境にあるスノーヒル村にある。

写真 2-11 スノーヒル・マナー&ガーデン



写真 2-12 スノーヒル・マナー&ガーデン



821年から1539年までウインチカム修道院（Winchcombe Abbey）が所有していたが、ヘンリー八世（King Henry VIII）による宗教革命により修道院は解体され、マナー・ハウスは王の所有となった。その後、第六夫人のキャサリン・パー（Katherine Parr）に贈与された。1919年チャールズ・P・ウエイド（Charles Paget Wade）によって買い取られ、彼のコレクションをおさめるための家となった。1951年にナショナル・トラストに寄贈された。

彼はコレクションを見る人々が職人の熟練した技能を認識することを望んでいたという。コレクションの数はおよそ二万二千点以上、そのすべてが職人の手による優れた工芸品と評価されている。コレクション内容は日本の甲冑26体をはじめとして日常生活に密着した品（楽器、時計、玩具、自転車、機織機など）が多い。コッツウォルドのトレジャーハウス（宝の家）といわれている。置かれている椅子や門柱などはウエイドブルーと言われている青にペイントされている（写真2-13）。

マナーハウスは混雑時にはその建物のサイズと展示してあるものが壊れやすいものが多いため、また観光客の安全と快適さを保つために入場人数制限を行っている。また木の床を歩くために、ヒールによる入場、室内でのカメラやビデオ撮影の禁止、大きな荷物などは入口で預ける、などの制限がある。照明は工芸品に影響がないように調整されている。21の部屋がありそれぞれの部屋にはナショナル・トラストのボランティアのメンバーがおり丁寧な説明がなされている。

庭園はウエイドとバリー・スコットによるアーツ & クラフツ・ガーデンとしても有名である（写真2-14）。オーガニック庭園であり、そこでとれた野菜、レタス、

写真 2-13 「ウエイド・ブルー」に塗られたシートに座って庭園を眺める観光者たち



写真 2-14 庭園



ラディッシュ、ハウレンソウやニンジンなどはマナーハウスのレストランで提供されている。野生の動植物の保護もおこなっており、野生のモモやバラなどをはじめとして多くの野生植物やハチやテントウ虫などの生息地としても有名である。

スノーヒル・マナー・ガーデンにはレストランがあり、ここではモーニングコーヒー、昼食、アフタヌーンティを楽しむことができる。マナーハウスの内部の写真を撮ることができないため、ショップでは絵ハガキなどを販売している。またマナーハウスにはピクニックエリアが設けてあり、マナーハウスと庭園を訪れた家族が気兼ねなくピクニックランチを楽しむ場所が作られている。また幼児のおむつを変えるスペースやミルクをあげるスペースも観光客案内所の建物の中に設けてあり、幼児のころから自然に親しむことができるような工夫がなされている。子供たち向けの探検ツアーは月に2回開催されている。開館は3月から10月までとなっている⁹⁾。

(3) キフツゲート・コート・ガーデンズ

キフツゲート・コート・ガーデンズはコッツウオールド地方のチップینگ・カムデンにある母娘三代にわたって作られた庭園である(図2-1)。ヒドコート・マナー・ガーデンから歩いて5分くらいのところに位置する。1918年ヘザー・ミューア(写真2-15)とJ.B. ミューア(Heather Muir & J.B. Muir)がこの邸宅を購入し、自然を愛し詩人でもあったヘザーが庭園を造りはじめた。その後、娘のディアニー・ビニー、孫のアン・チェンバーに庭園作成が引き続けられた。現在のオーナーはアン・チェンバーと夫のジョーニー氏である。春から夏にかけては一般公開している庭園であるが¹⁰⁾、チェンバー家の自宅でもある(写真2-16, 2-17)。軽食を食べることのできるティールーム(写真2-18)や庭園で実際に植栽している植物の販売も行っている(写真2-19)。家族連れで来た場合、庭園の外に広大な芝生があり、そこでピクニックランチを楽しむことができるようになっている。現在個人が住んでいる住宅であり、庭園をめぐる道も狭いことかがガイドによる案内は行っていない。しかし、チェンバー家では庭園を十分に楽しみ散策してもらうためには少なくとも1時間30分くらいはかけて欲しい、必要なだけ時間を使って楽しんでもらいたいと述べている。

写真2-15 ヘザー・ミューア



写真2-16 チェンバー氏の自宅と庭園



写真 2-17 庭園とそれをながめている観光者



写真 2-18 ティールーム



写真 2-19 植物を販売



ヘザーが 1820 年代に最初に着手したのがイエロー・ガーデン (図 2-1 の番号⑪) とローズ・ボーダー・ガーデン (図 2-1 の番号⑫) であった。ここにあるキフツゲート・ローズ (写真 2-20) はこの地で新種と認められた白のつるバラであり、キフツ・ゲートの名前を有名するのに一役かったものである。ゲードを入ると左手にフォースクエアがあり美しい花が咲き乱れている (写真 2-21、図 2-1 の番号⑬)。

写真 2-20 キフツゲート・ローズ



写真 2-21 フォースクエア・ガーデン



庭を散策していると女性の形をした有名なシートがある (写真 2-22)。アン・チェンバーはテニスコートであった場所に作成したウオーター・ガーデン (写真 2-23、図 2-1 の番号⑭) を作成し、そこには彫刻家のサイモン・アリソン (Simon Allison) が作成した 24 のステンレススチールで茎を作成したサトイモ科のつる植物があり、風に揺れて涼しげな様相を見せている (写真 2-24)。

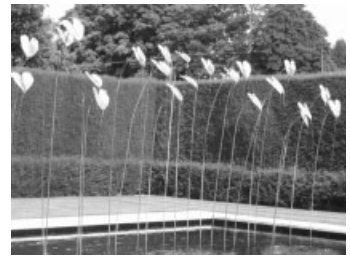
写真 2-22 女性像のシート



写真 2-23 ウォーター・ガーデン



写真 2-24 ウォーター・ガーデン



ローアー・ガーデン (写真 2-25、図 2-1 の番号⑧) はさまざまな花が咲き乱れ、その下にはプールがあり (写真 2-26)、そこからコッツウオールド丘陵からミケルトン村 (写真 2-27) を望むことができる。ハーハーがあるため (図 2-1) ミケルトン村が続いている景色として見る事ができる。

写真 2-25 ローアー・ガーデン



写真 2-26 ローアー・ガーデンからみるプール



写真 2-27 ミケルトン村

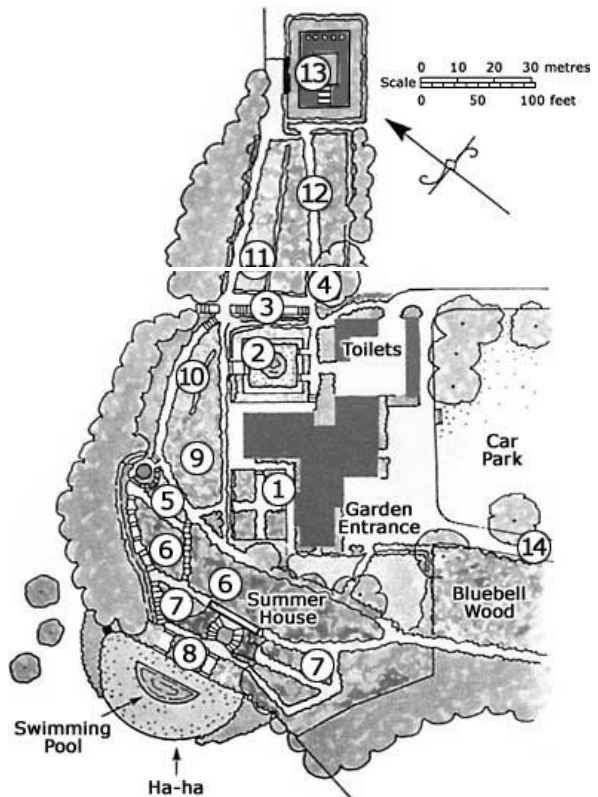


図 2-1 キツゲート・コート・ガーデンズ内の地図 (上記HPより転出)

5. まとめ

英国コッツウォルズの庭園での実態調査から、観光者が満足し、再度訪れたいと評価する要因として以下の3つをあげることができよう。

(1) 観光者がその地に住んでみたいと感じること

英国庭園を訪れた観光者は庭園で楽しそうに散策している人々を見て、あるいは家族連れの人々がピクニックエリアで楽しそうにまたのどかにピクニックランチを食べている姿を見ることで、観光者は自分もそのようなことをしてみたい、ここに住んでみたいという気持ちになるのである。その地に住んでいる人が楽しそうに生活をしている姿が観光者を引きつけているのである。いずれの庭園にもその観光地のにぎわいが観光者を呼び寄せている。

(2) 観光地の環境が保全されていることがわかること

英国庭園の森林や植物あるいは庭園にある建造物が良好に保存されていることが、観光者にわかる。庭園内は掃除が行き届き、全くゴミが落ちていない。また、スノーヒル・マナーでは、建物の強度を考え、一度に多くの観光者を建物に入れられないなど、文化遺産の保全への注意がなされている。観光地の環境や文化遺産がきちんと保全されていること、それが観光者に見えることが重要である。このような観光地の環境保全にはナショナル・トラストが大きな役割を果たしている。

(3) 観光地の迎える側のホスピタリティが良質であること

英国庭園では良質のホスピタリティを味わうことができる。とりわけボランティア・ガイドの役割が大きく、ヒドコート・マナー・ガーデンやスノーヒル・マナーなどでは彼らによる熱心で丁寧な説明がなされていた。観光者に対してさりげない対応でもてなしの心を表している。加えて庭園自体がもてなしの心を表している。たとえば、いずれの庭園にも庭園の創設者が訪れた人にもっとも見せたいと考えているビューポイントにシートが置いてあり、みえるようになっている。ゆったりと楽しんでほしいというおもてなしの心がシートをおくことで表しているのである。

本研究の英国庭園の実態調査から観光者満足向上のための要因として上記の3つが明らかとなった。日本において2009年の観光白書では、観光者からみた観光地における取組とその評価との関係性を検証している。その結果、観光者が再度その地を訪れたいと思う要因として、第一に観光地のにぎわい、第二に観光地におけるおもてなしの品質、第三に観光地の環境保全があげられている(図2-2)。日本においても、観光者が楽しそうにしている姿がみえること、つまり観光地のにぎわいやおもてなしの心が観光者に伝わること。そして、観光地の文化遺産が保全されていることが観光者満足を向上させることが示唆されている。このことから異なる国においても観光者が満足し、感動を覚え再度その地を訪問したいと考える要因に違いはないことが示されている。日本が観光立国としてそれぞれの地域の魅力を観光者に伝え、再度その地を訪れたいと思ってもらうためには、これらの要因をいかに実行し、継続していくかが重要であろう。

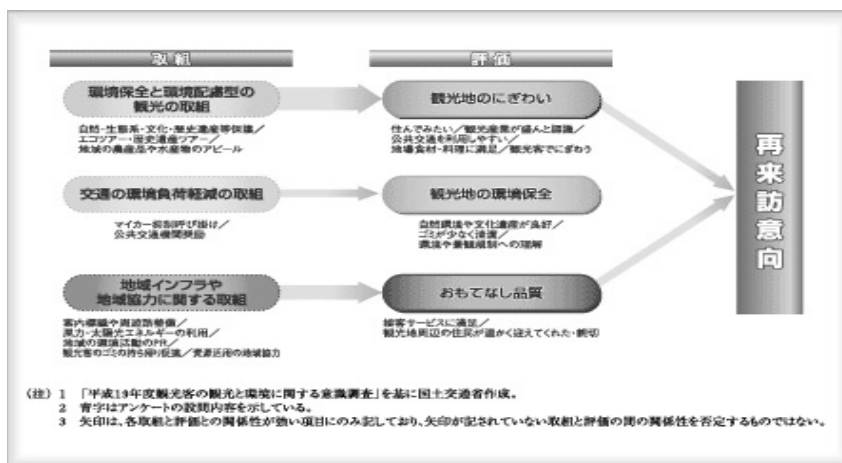


図2-2 観光客から見た環境保全の取組とその評価の関係（観光省、2009）

参考文献

研究1

- 橋本俊哉, 2010 『改訂新版 現代観光総論』学文社, 78-79
 海津ゆりえ, 1998 『現代観光学キーワード』学文社, 47.
 木原啓吉, 1992 『ナショナル・トラスト』三省堂, 36-45
 The National Trust, 2009, *Handbook for members and visitors 2009*, The National Trust
 日本フットパス協会, 2009, <http://www.japan-footpath.jp/>
 英国ナショナルトラスト HP, 2010, <http://www.nationaltrust.org.uk/main/>
 岡真理子・岡田章宏, 2007, ナショナル・トラストの現代的変容—エンタープライズ化する新たなチャリティのあり方—, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第1巻第1号, 117-133
 重松敏則・入倉彩, 1994, イギリスの自然歩道システムとその運営管理について, 造園雑誌 57 (5), 日本造園学会, 325-330
 尾家建生・金井萬造, 2008, 『これでわかる! 着地型観光 地域が主役のツーリズム』, 学芸出版社
 林望 (1993) 「イギリスの風景と心」『TABIT0号, 3-6』

研究2

- 赤川裕 2009 『イギリス庭園散策』 岩波書店
 E. モバリー, ベル 『英国住宅物語 ナショナルトラストの創始者オクタヴィア・ヒル伝』 平弘明・松本茂 (訳)
 岩切正介 2008 『ヨーロッパの庭園』 中公新書
 桐原春子 2006 『とっておきの英国庭園』 千早書房

- 小関由美 2008 『英国コッツウォルズをぶらりと歩く』 小学館
小林章夫 1998 『図説英国庭園物語』 河出書房新社
中島恵理 2005 『パートナーシップとローカリゼーション 英国の持続可能な地域づくり』
学芸出版社
中山理 2003 『イギリス庭園の文化史』 大修館書店
小野まり 2006 『図説英国ナショナル・トラスト紀行』 河出書房新社
小野まり 2007 『図説英国コッツウォルズ 憧れのカントリーサイドのすべて』 河出書房新社
<http://www.nationaltrust.org.uk/snowhillmanor>
<http://www.nationaltrust.org.uk/hidotemanorgarden>
<http://www.kiftgate.co.uk>

- 1) ロンドン王立協会 (The Royal Society of London)。1660年に設立されたこの協会は英国で現存するもっとも古い科学学会である。英国の科学の運営や行政にも影響力をもち、英国の科学者団体の頂点にあたる。
- 2) 沈め垣、空堀 (からぼり)。18世紀の半ば、イギリス各地に風景庭園が造られたとき、以前の庭を囲んでいた塀や垣根が取り壊され、外側の自然の風景との融合がはかるために、深さ2メートルほどの「空堀」が作られた。「ハーハー」の両側の地平面を同じ高さに行っているため、庭園と自然の風景を一体化してみせる効果がある。馬で近づいた人が急に足元に掘られた空堀を見て、「ハッ」と驚きの声をあげたのが命名の由来であるとされている (cf. 赤川, 2009)。
- 3) クロード・ロラン (1600-1682)。歴史的風景画家。ローマ近郊の廃墟や遺跡のある風景のスケッチを組み合わせて合成した風景画で、絵の中心部分の近景には、かならず、ギリシャ・ローマ神話の神々や「オデュッセイア」などの叙事詩の英雄、また、聖書の人物などの歴史的テーマを表す人物が描かれている。当時の風景画は、このような主題を風景の中に置き、神話的歴史的舞台の一シーンに仕立てて初めて絵として認められていたのである。
- 4) 装飾庭園は「愉しみの庭」で、邸宅の延長とも考えられ、気軽に出て、花壇、彫像、噴水、ばら園、温室、園庭などを楽しむところとされた。温室は植物のためだけにあるのではなく、食事や団樂、あるいは静かな読書、また宴や音楽界などにも使われた (岩切, 2008)。
- 5) カーペット・ベディング (carpet bedding)。古典主義が復活した十九世紀ヴィクトリア朝庭園の中心的技法。整形的は空間に、背の低い葉物や花の背丈をそろえて密植し、絨毯もようのような効果をあげた「もうせん花壇」「カーペット植え込み」のこと。
- 6) ボーダー (border)、縁取り花壇。庭園の塀際や壁際、通路わきに沿った細長い空間を活用して植栽したもの。十九世紀末以降、都市化した市民住宅の庭面積の縮小もあり、ボーダーは現代英国庭園の必須の技法となった。
- 7) トピアリー (topiary)。庭木を彫刻的に仕立てた装飾刈り込みのこと。最も古い西洋庭園技法の一つ。ツゲやイチイなどの遅育性の樹木を刈り込んで、ある種の形、鳥やリスなどの生き物、球形、円錐形などの幾何学立体に見えるように育てる技。語源的には「庭師のもの」という意味があり庭師の腕の振るい所であった。
- 8) ヒドコート・マナー・ガーデンは2月末から12月の初旬までオープンしている。ただし、2月と3月、11月と12月は土日のみなど月によって、オープンの時間と曜日が異なっているため、訪問する場合には詳細を www.nationaltrust.org.uk/hidotemanorgarden で確認のこと。

- 9) スノーヒル・マナー・ハウス & ガーデンは3月から10月までの水曜日から日曜日、マナーハウスは12:00-17:00、ガーデンは11:00-17:30までオープンしている。詳細は www.nationaltrust.org.uk/snowhillmanor で確認のこと。
- 10) キフツゲート・コート・ガーデンズは4月と9月は日、月、水の14:00-18:00、5月から7月までは木、金以外の毎日の12:00-18:00、8月は木、金以外の14:00-18:00までオープンしている。また、ティールームがあり、5月から7月までは軽食が、季節に関わらずホームメイドティーを飲むことができる。詳細は www.kiftgate.co.uk にて確認のこと。
- 11) 写真2-14はスノーヒル・マナー & ガーデンのHPより、写真2-20はキフツゲート・ガーデンのHPより転写、それ以外の写真は筆者が撮影したものを使用した。